

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02453

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容のインターテクスチュアリティ

研究課題名（英文）An Intertextual Study of the Victorian Visual Reception of Shakespeare

研究代表者

大島 久雄 (Oshima, Hisao)

九州大学・芸術工学研究院・准教授

研究者番号：80203769

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヴィクトリア朝のシェイクスピアの視覚的受容についてインターテクスチュアリティ研究を行い、舞台・絵画・挿絵・諷刺画などにおけるシェイクスピアの視覚的受容のインターテクスチュアリティとその特徴を明らかにした。大英帝国の繁栄とその視覚的な娯楽文化の中でシェイクスピア上演はスペクタクル重視の傾向を強め、英国の国民的なアイデンティティとしてシェイクスピア国民詩人化が進む。印刷や写真や他の視覚的娯楽芸術の進化とともにシェイクスピア作品の登場人物や場面は多様な視覚的受容の中で再解釈され、歴史スペクタクル上演やポイデルのシェイクスピア・ギャラリーやパンチ誌におけるシェイクスピアの諷刺利用へと展開していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シェイクスピアの視覚的受容をヴィクトリア朝という時代に限定して論じることにより、今日までつながるシェイクスピア国民詩人化・崇拜のプロセスの視覚的な側面の重要性を舞台や絵画や諷刺画等の具体的な受容事例から明らかにすることができた。成果は国内・国際学会において研究発表を行い、インターテクスチュアリティ批評理論にフォーカスをあてたシンポジウムも研究成果発表の一環として行った。シェイクスピア絵画に関する公開講座を開催して好評を博し、研究成果の社会還元も実施できた。ヴィクトリア朝から日本の明治時代へと受け継がれたシェイクスピア受容に関しても貞奴や松井須磨子のオフィーリアを取り上げて具体的に証明した。

研究成果の概要（英文）： This project has studied the intertextuality of the Victorian Visual Reception of Shakespeare, focusing on Victorian stages, paintings, illustrations, caricatures and examining them from the perspective of intertextual theory. The prosperity of the British Empire brought fourth the nationalistic culture of sight leading to spectacular historical stages of Shakespeare, who became the national poet as the icon of the national identity. Through the technological development of visual arts such as printing, photo, and other visual entertainments, Shakespearean scenes and characters were reinterpreted, leading to historical spectacular stages, Boydell's Shakespeare Gallery and Shakespearean caricatures in the Punch Journal.

研究分野：シェイクスピア

キーワード：シェイクスピア ヴィクトリア朝 視覚的受容 インターテクスチュアリティ シェイクスピア絵画 諷刺画 スペクタクル舞台

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

科研基盤研究 C 「翻案映画におけるシェイクスピア受容のインターテクスチュアリティ」(2010-2013: 22520252)においてシェイクスピア映画における翻案受容とそのインターテクスチュアリティに関して研究を行い、初期シェイクスピア映画へと発展していく映画前時代のシェイクスピア視覚的受容とそのインターテクスチュアリティに関する研究を立案した。特にヴィクトリア朝時代(1837-1901)はシェイクスピアの視覚的な受容が加速した時代であり、そこには帝国主義や植民地主義により覇権を拡大していた大英帝国の政治・社会・文化的な諸状況が背景にある。そのような大英帝国のシンボルとして国民詩人シェイクスピアのイメージが確立し、ヴィクトリア朝の人々にとってシェイクスピアは空気のような存在として様々な社会・芸術文化の領域・分野にシェイクスピア崇拜が浸透していた。ロンドンと地方都市の発展による社会生活の都市化と都市人口集中も劇場やその他の視覚的娯楽施設の発達に寄与して、写真・投影などの視覚的娯楽テクノロジーの進化につながり、上流階級の社交習慣や拡大していくツーリズムがその需要をますます高めることとなった。劇場における歴史スペクタクル上演、挿絵入り全集発行、シェイクスピア絵画の成立と人気など、都市芸術文化における視覚的要素の拡大は、シェイクスピア受容にも及んだのである。

ヴィクトリア朝の視覚的娯楽産業や劇場上演のスペクタクル化に関しては、Richard Southern, *The Victorian Theatre: A Pictorial Survey* (1970)、Richard Foulkes, ed., *Shakespeare and the Victorian Stage* (1986)、Richard W. Schoch, *Shakespeare's Victorian Stage: Performing History in the Theatre of Charles Kean* (1998)、Gail Marshall and Adrian Poole, eds., *Victorian Shakespeare, 2 Vols* (2003)等によって示され、George Rowell, *Queen Victoria Goes to the Theatre* (1978)によるとヴィクトリア女王自らが率先して視覚的な娯楽や演劇を楽しんでいたことが知られている。シェイクスピア崇拜の道を開いたデヴィッド・ギャリックによるシェイクスピア・ジュブリー(1769)以降、印刷技術の進歩と書籍・新聞・雑誌文化の大衆化により、シェイクスピア崇拜と国民詩人化がもたらしたシェイクスピア作品の視覚的受容の重要性がますます高まっていったことは、Michael Dobson, *The Making of the National Poet: Shakespeare, Adaptation and Authorship, 1660-1769* (1994)などの研究に示唆されている。特に英国におけるシェイクスピア絵画の誕生とその成長は、視覚的受容の活性化の証拠であり、Rosie Dias, *Exhibiting Englishness: John Boydell's Shakespeare Gallery and the Formation of a National Aesthetic* (2013)、Stuart Sillars, *Painting Shakespeare: The Artist as Critic, 1720-1820* (2006)、Alan R. Young, *Punch and Shakespeare in the Victorian Era* (2007)が示しているように、ボイデルのシェイクスピア・ギャラリーから発展し、ラファエロ前派のシェイクスピア絵画や「シェイクスピアリアニティ」と呼ばれる雑誌パンチ等の風刺画にもつながる英国のシェイクスピア絵画の系譜が誕生する。特にシェイクスピアの名場面や登場人物の視覚的受容に関しては、当時のスペクタクル重視の舞台や俳優達の名演が大きく関与していて、日本の浮世絵にも見られる舞台絵や役者絵との類似点もあるが、その核に一人の劇作家への国民的崇拜があった点は大きな相違点である。

インターテクスチュアリティ研究に関しては、Graham Allen, *Intertextuality* (2000)に解説されているように、作品が社会に流布する諸言説の中で受容されていくテキストと言説の動的な関係に注目するものであり、科研基盤研究 C 「『テンペスト』受容研究：テキストと言説とインターテクスチュアリティ」や上記のシェイクスピア翻案映画科学研究などによってインターテクスチュアリティ批評理論とシェイクスピア研究への応用について研究を深めてきた。Stephen J. Lynch, *Shakespearean Intertextuality: Studies in Selected Sources and Plays* (1998)等のように材源研究から派生した研究が多いが、シェイクスピアのアフターライフと後世の受容を考える上でインターテクスチュアリティ批評理論とその応用研究の重要性はますます高まっている。シェイクスピア受容に関しては翻案・上演史研究の中で行われることが多かったが、視覚的受容に関して多様な視覚的受容事例を体系的に取り上げた研究はまだ少なく、ここに本研究の意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヴィクトリア朝時代のシェイクスピア劇作品視覚的受容とそのインターテクスチュアリティを分析し、時代の様々な芸術形態や表現様式、そしてそれを取りまく社会の多様な言説と融合し受容されたシェイクスピア劇作品の視覚的触媒作用について明らかにすることである。シェイクスピア受容研究はすでに盛んであり、多様な方法論による重要な成果がすでに公開されているが、シェイクスピア劇作品の視覚的受容に関する体系的な研究はまだ未発展で方法論も確立していない。シェイクスピア視覚的受容に関する体系的な研究方法を提案していくことも本研究の課題であり、また、Michele Marrapodi, ed., *Shakespeare, Italy, and Intertextuality* (2004)等のように新しい研究も出てきているが、インターテクスチュアリティ批評理論のシェイクスピア研究における応用に関しても可能性が多く残された分野なので、この点に関しても応用研究により成果を出して新たな研究方法を提案していくことを目指す。

ヴィクトリア朝時代は、大英帝国の繁栄の頂点に位置し、Jeffrey A. Auerbach, *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display* (1999)が示唆するように、ロンドン万国博覧会(1851)は、帝国主義的な眼差しを反映した視覚文化の拡大を証明する国家的イベントであった。国民詩人シェイクスピア崇拝についても多様なメディアにより視覚的に増幅され、歴史スペクタクル重視のシェイクスピア上演様式やシェイクスピア絵画・諷刺画・挿絵などのシェイクスピア視覚的受容が活性化した。Richard Foulkes, *Performing Shakespeare in the Age of Empire* (2002)が示しているように、舞台ではチャールズ・キーン、サムエル・フェルプス、ヘンリー・アーヴィング、エレン・テリー、ヘンリー・ピアボーム・ツリーらのシェイクスピア俳優の名演技が、シェイクスピア視覚的受容をさらに加速させ、舞台絵や役者絵として記録され、あるいはシェイクスピアを素材とする画家やイラストレーターの想像力の産物が、印刷技術の進歩と大衆化により新聞・雑誌等のマスメディアやシェイクスピア挿絵全集により大衆化されて拡散された。

このようにサイレント期の初期シェイクスピア映画につながるヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容の大衆化のプロセスに関してケーススタディを積み重ねながら、各事例の地域性・歴史性・政治性等のインターテクスチュアリティを解明することが本論の目的である。ただし2019年に発生した新型コロナウイルスの世界的拡大により海外調査や国内・国際学会への参加が困難となり、海外調査ができないので研究の方向性を修正する必要に迫られた。研究期間を一年延長し、2020年と2021年は、国内研究機関で資料調査を行い、ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容が日本におけるシェイクスピア受容にどのような影響を与えているのかについてのインターテクスチュアリティ研究へと方向修正を行った。

3. 研究の方法

研究の方法としては新たな研究成果につながるような研究資料の収集と発掘が本研究の重要な課題であり、ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容と関連研究に関する文献資料の収集を行い、英国シェイクスピア研究所、大英図書館、米国フォルジャー・シェイクスピア図書館、国立国会図書館等において視覚的資料・文献資料調査を実施した。特に視覚的受容の研究として視覚的資料の収集が必要であり、シェイクスピア絵画・写真・舞台関連図の調査と収集も行った。上記の施設に加えて、英国ナショナル・ギャラリー、ナショナル・ポートレート・ギャラリー、テート・ギャラリー、ロイヤル・アルバート博物館、米国ナショナル・ギャラリー、ロンドン・クローブ座においても調査を行い、国際学会展示や海外展覧会等も資料収集の場として活用した。

2016年はシェイクスピア没後400年であったため記念の国際学会と展覧会等がストラットフォード・アポン・エイヴォンとロンドンで行われ、没後四百年記念シェイクスピア国際学会に参加しつつ、関連する視覚的資料を上記研究施設で多く収集することができた。ブリティッシュ・ライブラリーで開催されていた“Shakespeare in Ten Acts” (2016)展は、本研究に関連した一次視覚資料の調査を可能にしたが、視覚的受容活性化に寄与したシェイクスピア崇拝の伝統も、正にデヴィッド・ギャリック開催シェイクスピア・シュブリーから始まったと言っても過言ではなく、シェイクスピア百年祭に自ら参加し、百年祭が持つシェイクスピア受容形成に果たす重要な役割を身をもって確認できた貴重な海外調査となった。記念国際学会会場となったストラットフォード・アポン・エイヴォンのシェイクスピア劇場でのロイヤル・シェイクスピア劇団公演、ロンドンのクローブ座・サム・ウォナメーカー劇場シェイクスピア公演、学会基調講演・研究発表などもシェイクスピア視覚的受容の理解に関して得るところが多かった。

収集した研究資料を分析して、それらの視覚的受容のインターテクスチュアリティを分析し、論文化して、国内・国際学会で発表した。特にヴィクトリア朝のシェイクスピア上演とシェイクスピア絵画の発展との関係について注目し、時代は遡るが、その発端にも位置するポイデル・シ

エイクスピア・ギャラリーの成立を都市文化とツーリズムとも関係づけながら分析した。これらのシェイクスピア関連の絵画や彫像の収集趣味は、帝国主義的・植民地主義的な博物学的関心と関連していて、その事例研究としてサー・ジョン・ソーン博物館の調査を行い、上記記念祭期間で“The Cloud-Capped Towers: Shakespeare in Soane’s Architectural Imagination” (2016)が開催中で、この展覧会調査からもヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容に関して貴重な資料を得ることが出来た。シェイクスピア視覚的受容において劇登場人物がますます重要な働きをしていることが判明したため、三人の魔女、マクベス、マクベス夫人、リチャード三世、ハムレット、オフィーリア等、人気の高い登場人物が視覚的にどのように受容されていたのかをシェイクスピア絵画や図像から分析し、そのインターテクスチュアリティについて検討した。特に、劇場でのシェイクスピア俳優の名演技が舞台を賑わせる中、特定俳優の演技がキャラクターに決定的なイメージを与え、絵画や図像にいかにか定着していったかを図像学的に分析した。このような特定のシェイクスピア劇登場人物の視覚的受容を取り上げたキャラクター図像学研究は、Carol Solomon Kiefer, *The Myth and Madness of Ophelia* (2001)が良い例であるが、インターテクスチュアリティの観点からもその有効性を示している。Stuart Sillars, *The Illustrated Shakespeare 1709-1875* (2008)が示しているように、視覚的に美しく提示された場面や登場人物が挿絵入りシェイクスピア全集を飾り始めると、読者のプライベートな書齋にまでシェイクスピア図像が入り込み、読む行為の中にも視覚的に見るのが介入し始める。

シェイクスピア登場人物の視覚的受容に決定的なインパクトを与えたのは、ラファエロ前派のシェイクスピア絵画である。ラファエロ前派のシェイクスピア絵画の人気は高く、カリカチュアとなり『パンチ』などでは諷刺画として引用されている。彼らの特異なシェイクスピア登場人物絵画は、ナショナル・ギャラリーでの“Reflections: Van Eyck and the Pre-Raphaelites”展 (2017-8)が示したように当時の注目された絵画や舞台や文学などとの結びつきも深い。意外なことに登場してきた写真術のリアリズムと関連することもナショナル・ポートレート・ギャラリー展 “Victorian Giants: The Birth of Art Photography”(2018)は示唆していた。最初のアート写真作家として知られる Julia Margaret Cameron (1815-79)は、劇や小説の登場人物になり切ったかのような芸術的肖像写真を多数残しているが、シェイクスピア俳優・女優も絵画からアート写真の可能性に注目し始める。Diana Donald, *The Age of Caricature: Satirical Prints in the Reign of George III* (1996)が示すように、ジャーナリズム的諷刺画は、ヴィクトリア朝よりも前から英国に定着していたが、パンチの世相・政治風刺画は、シェイクスピア視覚的受容の大衆化を加速し、劇登場人物に新たな社会的意味・価値を与えることになった。このようなシェイクスピア視覚的受容の大衆化のプロセスとそのインターテクスチュアリティについても調査・分析を行った。

視覚的受容に関する資料を収集するためには海外の美術館・博物館・図書館などの研究施設における資料調査が欠かせないが、最後の二年間は新型コロナウイルス感染の世界的な拡大により海外での資料調査や国際学会への参加なども不可能になったため、研究の方向性と方法を修正せざるを得なかった。これにより国内研究施設における資料収集・調査に切り替えて、インターテクスチュアリティの観点からのシェイクスピア視覚受容研究を研究し、特にこれまで調査してきたヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容が日本におけるシェイクスピア受容にどのような影響を与えているのかについて研究した。

研究成果については、以下に詳述しているように、国内・国際学会で研究発表を行い、関連学会ジャーナルに論文等として発表した。研究成果の社会還元の一環として公開講座を企画して実施した。

4. 研究成果

上記の研究方法によってヴィクトリア朝シェイクスピアの視覚的受容に関して多角的なアプローチによりケーススタディを行い、視覚的受容とそのインターテクスチュアリティを分析し、インターテクスチュアリティ批評理論をシェイクスピア劇の視覚的要素や演出に対しても適用して研究方法としての有効性を検証した。シェイクスピアの視覚的受容は、デヴィッド・ギャリックなどのシェイクスピア俳優の名舞台とシェイクスピア・ジュビリー以降のシェイクスピア崇拜と国民詩人化の流れの中で活性化し、ロンドン万国博覧会にみられる大英帝国繁栄の中での帝国主義的な眼差しにも支えられながら、ヴィクトリア朝独自のユニークなシェイクスピア視覚文化を生み出した。それは、舞台の歴史スペクタクル化や英国絵画の発展とも密接に関係しており、ボイデル・シェイクスピア・ギャラリーによるシェイクスピアを題材とする歴史絵画の誕生は、

多くの役者絵や舞台絵を生み出し、それらが本の挿絵となり、あるいは諷刺画として絵入ジャーナリズムの中で消費されることにより大衆化していく。

第 58 回シェイクスピア学会(2019)で研究発表を行った「シェイクスピアと三人の魔女～視覚的受容の図像学～」は、『マクベス』における重要な登場人物である三人の魔女が『ホリンシェッド年代記』の挿絵から派生して現存する最初期のシェイクスピア絵画の誕生にも貢献し、ポイデル・ギャラリーの画家たちにも取り上げられた後、いかに諷刺画の中に使われて英国独自のカリカチュアの伝統を生むとともに、国民的な雑誌『パンチ』の中の「シェイクスピアリアニティ」として大衆化していくかを明らかにした。特に諷刺におけるシェイクスピア視覚的受容に関しては、九州シェイクスピア研究会(2019)で発表した「ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容：ラファエロ前派シェイクスピア絵画と”Shakespeareanity”」で論じた。ラファエロ前派のシェイクスピア絵画については写真技術との関係に注目したヴィクトリア朝視覚的受容について“A Psychological Study of the Pre-Raphaelite’s Visual Reception of Shakespeare”を The 35th International Conference on Psychology and the Arts (2018)において発表した。

シェイクスピア受容と全集という出版形態との関係については、“The 3rd Biennial Conference of the Asian Shakespeare Association” (2018) において “Shoyo Tsubouchi and His Complete Works of Shakespeare”という題目で研究発表を行い、坪内逍遙訳全集における挿絵とヴィクトリア朝期にシェイクスピアの大衆化にも貢献した挿絵入り全集との関係を指摘した。

本来ならば海外調査によりシェイクスピア関連の挿絵入り全集や雑誌諷刺画や初期スライド写真・サイレント映画に関する資料を収集し、シェイクスピア視覚的受容の大衆化の過程をさらに研究する予定であったが、2019年に発生した新型コロナウイルスの世界的な蔓延により海外調査や国内・国際学会への参加も困難となったため、研究期間を一年延長し、遠隔学会への参加も増えたが、海外調査ができないので研究の方向性を修正する必要に迫られた。2020年と2021年は、国内研究機関でしか資料を調査できないので、ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容が日本におけるシェイクスピアにどのような影響を与えているのかについて、インターテクスチュアリティ批評理論応用検証は継続しつつ、研究を行った。日本英文学会九州支部より2020年支部大会イギリス文学部門シンポジウムを依頼され、他三名のシェイクスピア研究者とともに「演劇とインターテクスチュアリティ～シェイクスピア・地図・予言・ジェンダー・歴史書」を企画したが、延期となり2021年にウェブ・カンファレンスとしてシンポジウムを開催した。地図・予言・ジェンダー・歴史書とシェイクスピア劇とのインターテクスチュアリティ関係性が示されたが、「シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ」という題目で研究発表を行い、リア王に関する視覚化された歴史言説とシェイクスピア劇のインターテクスチュアリティについて明らかにした(要旨は大会プロシーディングに掲載)。The 37th International Conference on Psychology and the Arts (2020: 遠隔参加)における“Lear in the Castle and Lear on the Beach: Tatsuya Nakadai and the Modern Issue of Aging”と World Shakespeare Congress 2021 (Singapore: 遠隔参加)における“Ruins and Akira Kurosawa’s War Memory in His Shakespearean Films”も視覚的受容伝統の中で分析したシェイクスピア視覚的受容インターテクスチュアリティ事例研究である。

The 4th Biennial Conference of the Asian Shakespeare Association (2020)はソウルでハイブリッド形式で開催され遠隔で参加したが、“Ophelia and the Japanese Actresses: The Role of Formative Influence on the Idea of *Joyū*”という題目で研究発表を行い、ヴィクトリア朝シェイクスピア女優エレン・テリーのオフィーリアが、インターカルチュラルなシェイクスピア視覚的受容の中でいかに川上貞奴や松井須磨子に受け継がれたかを明らかにした。この論文は、“Ophelia and the Tradition of *Joyū* in Japan” (2021年8月提出、12月受理)という題目で、韓国シェイクスピア協会刊 *Shakespeare Review Vol.57 No.4: Special Issue 2022: “Intersections in Shakespeare”*に掲載された。

最後に研究成果の社会・地域還元の一環として4件の公開講座を企画・開催し、九州大学大橋キャンパスにて一般市民を対象に2016年「絵画で楽しむシェイクスピア」、2017年「名優で楽しむシェイクスピア」、2018年「西洋近現代演劇入門」、2019年「近現代演劇における女優の魅力」を各年7月、90分4回開催し、各回のアンケートによると好評を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Hisao Oshima	4. 巻 57
2. 論文標題 Ophelia and the Tradition of "Joyu" in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Shakespeare Association of Korea: Shakespeare Review Special Issue "Intersections in Shakespeare"	6. 最初と最後の頁 615-632
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17009/shakes.2022.57.4.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大島久雄	4. 巻 74
2. 論文標題 シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第74回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 25-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大島久雄	4. 巻 17
2. 論文標題 ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容：ラファエロ前派シェイクスピア絵画と "Shakspeareanity"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州シェイクスピア研究会会報	6. 最初と最後の頁 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大島久雄	4. 巻 11
2. 論文標題 『テンペスト』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ～シェイクスピアと書物～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英文学研究支部統合号	6. 最初と最後の頁 357-366
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大島 久雄	4. 巻 14
2. 論文標題 World Shakespeare Congress2016 に参加して～シェイクスピア上演(研究)の新傾向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州シェイクスピア研究会会報	6. 最初と最後の頁 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島 久雄	4. 巻 14
2. 論文標題 マローウとシェイクスピアの劇における国王暗殺の政治性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州シェイクスピア研究会会報	6. 最初と最後の頁 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hisao Oshima	4. 巻 14
2. 論文標題 Book Review: Susan Bennett and Christie Carson, eds., "Shakespeare Beyond English: A Global Experiment" (Cambridge UP, 2013)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Multicultural Shakespeare Translation, Appropriation and Performance	6. 最初と最後の頁 137-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/mstap-2016-0021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 4件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Ruins and Akira Kurosawa's War Memory in His Shakespearean Films
3. 学会等名 The 11th World Shakespeare Congress, Singapore (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Lear in the Castle and Lear on the Beach: Tatsuya Nakadai and the Modern Issue of Aging
3. 学会等名 The 36th International Conference on Psychology and the Arts (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島 久雄
2. 発表標題 シェイクスピアと『ホリシエッド年代記』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第74回大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Ruins and Akira Kurosawa's War Memory in His Shakespearean Adaptations Films
3. 学会等名 The 11th World Shakespeare Congress, Singapore (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島 久雄
2. 発表標題 シェイクスピア国際学会(シンガポール)報告
3. 学会等名 九州シェイクスピア研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Ophelia and Japanese Actresses
3. 学会等名 The 4th Biennial Conference of the Asian Shakespeare Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島 久雄
2. 発表標題 シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ
3. 学会等名 日本英文学会九州支部大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 大島久雄
2. 発表標題 シェイクスピアと三人の魔女～視覚的受容の図像学～
3. 学会等名 第58回シェイクスピア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島久雄
2. 発表標題 ヴィクトリア朝シェイクスピア視覚的受容: ラファエロ前派シェイクスピア絵画と “Shakespeareanity”
3. 学会等名 九州シェイクスピア研究会例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島久雄
2. 発表標題 Ophelia and Actresses
3. 学会等名 The 4th Asian Shakespeare Association Seoul Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Shoyo Tsubouchi and His Complete Works of Shakespeare
3. 学会等名 The 3rd Biennial Conference of the Asian Shakespeare Association: Shakespeare, Traffics, Tropics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 The Pre-Raphaelites' Visual Reception of Shakespeare and their Victorian Sense of Sight and Psychology
3. 学会等名 The 35th International Conference on Psychology and the Arts (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島 久雄
2. 発表標題 『テンベスト』とファースト・フォリオのインターテクスチュアリティジェームズ朝的インターテクスチュアリティ
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第70回大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hisao Oshima
2. 発表標題 Tadashi Suzuki's "King Lear" and the Japanese Architecture
3. 学会等名 World Shakespeare Congress 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大島 久雄
2. 発表標題 World Shakespeare Congress 2016 に参加して ~シェイクスピア上演 (研究) の新傾向~
3. 学会等名 第178回九州シェイクスピア例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関